

フィールドワーク実践報告 東日本大震災で
被災した陸前高田市並びに広田地区のスタ
ディーツアーの試みと震災地スタディーツ
アーの効果を高めるための構成因

清水, 幹夫 / SHIMIZU, Mikio

(出版者 / Publisher)

法政大学現代福祉学部現代福祉研究編集委員会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

The bulletin of the Faculty of Social Policy and Administration :
reviewing research and practice for human and social well-being / 現代福
祉研究

(巻 / Volume)

14

(開始ページ / Start Page)

95

(終了ページ / End Page)

125

(発行年 / Year)

2014-03-01

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00009654>

＜フィールドワーク実践報告＞

東日本大震災で被災した陸前高田市並びに広田地区のスタディーツアーの試みと震災地スタディーツアーの効果を高めるための構成因

清 水 幹 夫

【抄録】 筆者が担当した2012年度「基礎演習」履修生に東日本大震災の被害状況や震災復興過程の実地見聞の機会を提供したいとの願いからスタディーツアーを企画し実施した。企画過程と実施結果を報告すると共に、学生の事後レポートを検討し、同様の被災地スタディーツアーを効果的に展開するための一般的な「構成因」、「目的因」、「内容因」、「事前学習因」、「経費因」、「期間因」、「動機づけ因」、「事故対応因」、「担当者の関与因」、「学生の関与因」、「事後学習因」を抽出した。この過程で、単なる構成因の抽出に止まることなく、大学におけるフィールドスタディーツアー、野外実習、校外実習、企業インターンなどに共通する体験学習のモデルと理論を模索することの必要性を強く感じた。

なお、本報告については、研究倫理委員会の審査を経ている。（法政大学大学院人間社会研究科研究倫理審査委員会第120302-2号）

【キーワード】 スタディーツアーの構成因 フィールドワーク 東日本大震災 陸前高田市

1 問題と目的

1-1 「基礎演習」のカリキュラム上の位置づけ

法政大学現代福祉学部は、既存の福祉の概念を超えて、福祉や地域づくり、臨床心理学の視点を体系的・総合的に学びながら、人々の健康で幸福な暮らし（ウェルビーイング）を指向できる社会の専門的人材育成を目指して、2000年4月に発足した。学部発足当初のカリキュラムの中で、「基礎演習」は総合教育科目の中の人間・社会系科目の一つに位置づけられており、2004年の学部発足当初のカリキュラム構成を見直す中でも、「基礎演習」は引き続き総合教育科目の中の視野形成科目に位置づけられていた。2010年には、社会的な要請と教育内容の一層の充実を期して、これまでの現代福祉学科を発展的に組み替えて福祉コミュニティー学科と臨床心理学科を発足させた。これに伴い「基礎演習」は、両学科の共通科目群、視野形成科目の中の学部共通必修科目として位

置づけられるようになった(現代福祉学部10年誌編集委員会 2010)。

「基礎演習」は、20人程度の少人数制で、1年次生を対象とした4単位の通年科目であり、大学における学習の方法や図書館の利用、レポートの書き方ならびに発表の要領などを習得する授業として、必修科目になる前も2年次から履修する「専門演習」や3年生の各種実習科目の先行科目に位置づけられていた。カリキュラム改訂後は、新入生が大学の新しい学習環境に慣れたり、「地域づくり」、「福祉」、「臨床心理」の専門基礎科目や専門基幹科目、専門展開科目の学習を進めていく上での大事な必修科目として機能している。前期は、各基礎演習担当者共に共通のテーマとして「現代福祉学部での学習の基礎となるスキルと知識を習得すると共に、学生同士あるいは学生と教員との交流を通して、豊かな人間関係を育み、学部の理念であるWell-beingの考え方を学ぶ」を掲げ、基礎演習間の内容の共通性を図るために、前期は共通のテキストを活用しながら、社会福祉、地域づくり、臨床心理の入門的な知識の習得と福祉用具体験、図書館の活用方法、レポートの書き方、キャリア教育など大学と学部教育の基礎的な内容を学ぶことになっている。後期は、各担当教員の専門性やキャリアを生かしながら文献調査やフィールド調査、グループ討議、関係作りなどが行われている(現代福祉学部2012)。経年の「基礎演習」担当者の報告書には、それぞれ担当者によってさまざまな工夫がなされていて(馬場ゼミ2001、福屋ゼミ2001、山岡ゼミ2002、宮城ゼミ2002、馬場ゼミ2002、福屋ゼミ2005、福屋ゼミ2006、岡崎・安井ゼミ2012)、大学生活への意欲的な取り組みと、専門的な学部教育に主体的、積極的に取り組む姿勢を育て、なおかつ教員や学生同士の心理的距離を縮めながら現代福祉学部の専門演習に入っていくための大事な科目になっていると言える。

諸般の事情から、筆者は2012年度から「基礎演習」を担当することになった。前期は、どの基礎演習もある程度同じ内容で足並みを揃えて講義が進むので、それほど難しさは感じなかったが、後期は、筆者の専門性を生かしながらグループ討議や受講生の興味・関心に基づくテーマ設定と文献検索並びにパワーポイントによる発表をどうやって組み込むかが大きな課題だった。受講者の大学教育への主体的な取り組みの姿勢を養う大事な科目であるだけに担当教員の責任は極めて大きい。特に筆者は、フィールドワークやフィールドスタディーの経験がまったくなかったが、「基礎演習」になんとかフィールドスタディーを組み込んで、受講生の学習意欲と実習を重視する本学のカリキュラムに主体的に取り組む意欲と姿勢を育てたいと考えていた。

1-2 東北大震災の体験と仮設住宅調査体験を元に「スタディーツアー」の模索

筆者は2012年3月11日に、仙台秋保温泉でK大学児童教育学科の学生10名を対象とした人間関係訓練の合宿に参加していた。グループワークが始まって2時間ほど経った時に、異常に強い地震

があり、学生を誘導して戸外に避難をした。かなり強い余震が何度も来る上に、雪のちらつく寒い日だったので、ホテルの用意したバスの中で暖を取りながら2時間ほど過ごした。余震は落ち着いていたが、ホテルは倒壊の恐れがあり、建物の中には戻ることが出来ないというので、近くの小学校の体育館に設置された市の避難所に避難した。翌朝学生たち全員を無事にK大学の職員に引き渡した時には、ほっとした。その後、筆者は仙台市内の友人宅に避難したものの、新幹線が不通になりそのまま暫く友人宅にお世話になった。電気、ガス、水道、電話、PCが全く使えずにいたが、テレビが見られるようになり状況が判り始めたのは3日後だった。ロウソクの明かりで食事を取ったり、飲み水を求めて配水車に並んだり、バスタブの水の減りを気にしながらトイレを使うなど思いがけない体験だった。気遣いの友人夫妻に見送られ高速バスで山形経由で鶴岡に出て、さらに特急と新幹線を乗り継いでやっとの思いで自宅に戻ったのは8日目の事だった。

この体験から、東日本大震災の復興に向けてなにがしかの寄与をしたいと考えるようになり、2011年度4月より、本学の「サステナビリティ研究教育機構震災・原発タスクフォース」の一環として現代福祉学部N教授が中心になって進めている「陸前高田地域再生支援プロジェクト現地調査」に加わり、学部生や院生とともに2011年8月と2012年3月の2度現地調査に参加した。現地の被災状況や体験者からの聞き取り調査の過程で、現代福祉学部の学部生や人間社会研究科の大学院生が、教育的な観点から被災の現場を直接見聞きすることの意味を強く感じた。特に震災からの復興が進む過程で、現地にもお金が落ち、なおかつ教育的な視点から行われる中学や高等学校の修学旅行や大学のゼミのスタディーツアーの誘致は、震災復興後の地域興しの大事な検討課題になるという「陸前高田地域再生支援プロジェクト」の示唆を受けて、被災地のスタディーツアーを基礎演習に組み込んでみたいと思うようになった。

1-3 大学教育におけるフィールドスタディの重要性

本稿では、フィールドスタディは、海外研修、野外実習、校外実習、企業インターン、教育実習、ボランティア活動、スタディーツアーなどを包括する概念として捕らえておきたい。体系だった知的な学習や体験を中心とする学内での講義や実習は、形式知(形式言語で表すことの出来る知識)や科学知を重んじる「静的な学習」と呼ぶならなら、大学を離れて、地域や自然環境に直接出向いて体験を通して学ぶ学習は、体感知(暗黙の意味を伴う身体感覚)、体験知、内省知を重視する「動的な学習」と言える。動的な学習では、学生の五感を通して、学生の一人ひとりが自由で多様な体験をする。「静的な学習」と「動的な学習」は、互いに補完し合いながら、主体的で創造的な大学教育を実現していく車の両輪のような関係にあると言える。特に、現代福祉学部のような地域、福祉、心理の各分野の専門的な知識を総合的に学ぶと共に、平行して実際の生活や社会に触れ

ながら実践的で主体的な思考と行動の出来る人材を育てていくためには、新入生の段階からフィールドスタディーに馴染んでいく必要がある。日本の初等・中等教育は、学習指導要領を中心にしたどちらかというと、形式的な暗記中心の教育に重きが置かれ過ぎているように感じている。高等教育では、社会に出る前に体系的に学んだ知識体系を社会や生活環境での自らの固有の体験を学習に結びつけて行くような領域の脳の機能の活性化を促す機会を比較的早い段階から提供する必要がある。フィールドスタディーは、別の表現をするなら自らの体験を学びに変えていく「学び方を学ぶ」学習の機会 (2011 星野ほか) といえる。通常の生活では、厳しい暑さ寒さや極限の飢えや渇きにさらされる機会が殆どないような恵まれた環境で育ってきている多くの現代青年は、自らの体験を通して「感じ・気づく」機会も限られているといえる。そういった「感じ・気づく」力を発展させて、自らの学習につなげる機能を未開発のまま終わらせることのないように、いま以上に配慮していくのも現代福祉学部の使命の一つと考えたい。

1-4 スタディーツアーを成功裏に実施する構成因

そういった考え方から、たまたま担当するようになった学部1年生の基礎学習にフィールドスタディーを取り入れてみたいという考えと、先の「陸前高田地域再生支援プロジェクト」への参加体験とがつながり、スタディーツアーの実施を企画するに至った。

フィールドスタディーを効果的に進めるために参考となる先行研究を検索したが、理科教育、教職教育 (1995末武他)、英語教育、文化人類学、環境教育、経営学 (2003山下、2007湯沢、2007居駒、2007山下、2007井) の分野でのフィールドスタディー研究はかなりあるものの、大学の基礎演習としてのスタディーツアーに特化した文献を見つけることは出来なかった。このことから本稿では、試行的なスタディーツアーの報告がてら、立案過程と実施過程並びに参加した学生の事後レポートを検討することによりスタディーツアーの効果をたかめるための基本的な構成因を明らかにしたい。見いだされるスタディーツアーの構成因は、復興過程にある東日本大震災の今後のスタディーツアーの構成因にも役立つであろうし、さらには、さまざまなフィールドスタディーの企画や実施の基礎資料になることが期待される。

2 「基礎演習」としての試行的スタディーツアーの企画過程と参加学生の事前学習

現代福祉学部の「基礎演習」のためのスタディーツアーは、地域、福祉、心理の3領域に関わることであれば、どんな事でも取り上げることが出来ると思うが、筆者の専門領域は、臨床心理学のなかでも心理療法やカウンセリングなので、学部1年生を対象にしたスタディーツアーの地域

や現場はほとんど持ち合わせていなかった。そこで、陸前高田市の仮設住宅調査に参加した経験を踏まえて、対象地を陸前高田市広田地区に焦点を絞り、震災当時の状況と復興過程にある現地の状況が体系的に学習出来るようなスタディーツアーの計画を年度初めの「基礎演習」で受講者に提示した。当初は全員参加を希望していたが、スタディーツアー対象地が遠隔地でもあり、また公共の交通手段が完全復旧していない地区であるために、経費などが具体化する過程で、希望者は半数に減ってしまった。たとえ半数であっても、「基礎演習」に関わる試行的なスタディーツアーを実施することの意義は、極めて大きいと考えて実施に伴う経済的な困難を承知でチャレンジした。

2-1 スタディーツアー対象地区の選定理由

「陸前高田地域再生支援プロジェクト」では、2011年4月以後今日まで、プロジェクト関係者が何度も現地に入って様々な調査や被災地復興に向けての具体的な報告書や提言を行ってきている（東京4大学・陸前高田地区再生支援研究プロジェクト 2011、陸前高田地域再生プロジェクト 2012a、2012b、2013）。その中で、2011年8月と2012年3月の2度にわたり筆者が仮設住宅の住環境調査に参加して、気仙沼市、大船渡市、陸前高田市の被災状況と地理的な状況がある程度掴み得ていた事がスタディーツアー地区選定の大きな理由である。

2-2 2011年8月の現地調査の概容とスタディーツアーの主要ポイントの把握

「陸前高田地域再生支援プロジェクト現地調査」第2クールとして8月16日から20日にかけて行われた現地調査に参加した。学部生35名、大学院生5名、研究科生1名、大学教員3名、総勢44名の構成で実施された。学部生は東京から夜行バスで、教員と大学院生は、新幹線「水沢江刺駅」から調査地の足となるレンタカー5台を借りて現地入りした。現地では、滞在中に同じ時期に現地入りをした明治大学、中央大学、東京大学とともに手分けをして、「仮設住宅の住まいと暮らし」についての総合的調査をし、結果をまとめて関係の各方面に提言をしていくための聞き取り調査を行った（東京4大学・陸前高田地区再生支援研究プロジェクト2011、陸前高田地域再生支援プロジェクト2012a）。筆者は、この調査の過程で、レンタカー乗車単位の学部生、大学院生、研究生からなる調査グループの一つに加わり、気仙沼市、陸前高田市の津波被災地域の視察をしたり、陸前高田市の53の仮設住宅の内、5つの仮設住宅を訪ねて聞き取り調査を行った。現地では44名もの調査隊が泊まれる宿舎がなかったので、夜は1時間ほど内陸部に入ったキャンプ場に寝泊まりし、毎晩グループごとの反省会や情報交換を行っては翌日陸前高田市に戻って調査を行った。この調査に参加した事により、

- 1) 水沢江刺駅から陸前高田市内までの距離感

2) 陸前高田に隣接する気仙沼、大船渡の地理的状況や被害状況

3) 陸前高田市内の主要な被災場所

＊ 本庁舎、消防本部、中央公民館、市立図書館、市立博物館、市民体育館、海洋センター、高田松原跡ほか

4) 避難所や仮設住宅や仮設店舗の状況

などのスタディーツアーの対象地域を俯瞰することが出来た。また夜の学部生や院生の学年、性別、年齢を超えた情報交換、他大学の学生や教員との情報交換は、それぞれの体験を再確認する教育的な効果が高いことを強く感じるとともに今回のスタディーツアー企画に大きな参考になった。

2-3 2012年3月の現地調査とスタディーツアー対象地域の絞り込み

「陸前高田地域再生支援プロジェクト」の一環として2012年3月14日～17日の3泊4日の行程で行われた陸前高田市広田町と気仙町の調査に加わった。震災復興後を視野に入れた継続的支援策の模索を目的に、今回は法政大学、明治大学、中央大学の3大学による共同調査であった。筆者は、法政大学の教員3名、研究生1名、大学院生8名の13名のチームの一人として加わった。新幹線「一ノ関駅」から3台のレンタカーに分乗し、約2時間かけて陸前高田市広田地区に入った。法政大学は、広田地区が調査担当だったので、レンタカー定員数ごとに3班に分かれて2泊3日にわたる調査が行われた（陸前高田地域再生支援プロジェクト2012b）。この回は調査隊の人数が少なかったため、広田半島にある民宿に宿泊し、仮設住宅調査の他に、広田地区復興に関わるプロジェクトの代表者や地域の民生委員などから津波被害に関する詳しい情報を得たり、広田半島の過去の津波遺跡や温泉などの観光資源を確認したり、宿舎での調査結果のまとめや他大学との合同調査報告会などに参加することが出来た。この調査に参加したことにより、

- 1) 一ノ関駅から陸前高田までの距離感
- 2) 陸前高田市、気仙沼市、大船渡市被災地区の未復興の実情
- 3) 津波に関わる広田地区の地理的、歴史的、産業的、文化的な特徴
- 4) 広田地区の震災の特徴
- 5) 広田地区の震災前の防災対策、防災関係組織の実情
- 6) 広田地区の震災時の民生委員の活動状況
- 7) 広田地区の観光資源

について概略を知ることが出来た。このほか「陸前高田地域再生支援プロジェクト」の定期的な研究会で配布された広田地区集団移転資料（2012広田地区集団移転協議会、2012長洞集落、2012神谷、2012 広田地区集団移転協議会）も役に立った。広田地区（小友町、広田町）は殆どが半島

で、今回の震災では津波によって、陸地と広田半島が分断され数日間にわたり孤立してしまった。全半壊戸数約420で、今（2012年8月時点）でも約1200人の被災者が9地区の仮設住宅に分散して生活をしている。陸前高田市全体の死者と行方不明者は約1800人と報じられているのに対して、広田地区は約50人であった（2011 陸前高田市）。死者と行方不明者の数だけで災害の程度を単純に比較することは出来ないが、死者と行方不明者が他地域に比べてかなり少なかった要因を探ることをテーマに広田地区をスタディーツアーの対象地に絞り込むことにした。広田地区は約16km²程度の半島でもあり、歴史的にも文化的にも狭い地域に様々な要素がまつまっているのので、初めて震災地を訪れる学生たちにとって短期間の内に密度の濃い学習と体験ができる可能性を感じた。

2-4 スタディーツアーの実施内容の組み立て

1) スタディーツアー経費と実施期日

新幹線利用、高速バス利用、レンタカー利用など幾つかのケースを検討したが、どれも宿泊費と食費を加えると一人当たりの経費が5万円（2012年当時）を超えてしまうので、24人乗りの中型観光バスを借り切り、車中1泊、民宿2泊にすることによって学生の参加費を3万3千円に設定することが出来た。当初基礎演習生全員が参加を希望していたが、経費を提示した時点で、参加者は9名に減ってしまった。このために、筆者の関わりの深い千葉県教育委員会「こどもと親の支援センター」などに呼びかけ、教員と福祉施設職員6名の参加者を加えることによって、学生の参加費を企画通りに抑える事が出来た。さらに学生の参加費を下げるために、「法政大学東日本復興支援研究助成金」を申請したが内容が助成の主旨に合わないとの事で残念ながら採択はされなかった。

陸前高田市内の宿泊場所が少ない上に災害復興関係者の利用が多いので、予約が難しかったが、民宿の予約が取れた8月16日～19日の3泊4日の期間にスタディーツアーを実施することにした。

2) スタディーツアーの日程と内容

スタディーツアーの内容を企画するにあたり、これまで2回にわたる現地調査の体験を生かして、広く気仙沼市、大船渡市の津波被害の様子と復興状況を概観し、また陸前高田市内については全域の被害の様相と復興状況を詳細に視察した上で広田地区に入り、広田地区の特異な立地や地形を把握出来るようにした。また、広田地区のスタディーツアーでは、教育や子どもの対応に焦点を絞り、仮設住宅や被災した保育園長の講話、小学校長の講話、コミュニティーセンター長の講話、広田地区民生委員協議会長の講話、黒崎温泉理事長の講話、元気塾発案者の講話などを折り込みながら、被災地区の詳細を視察し、短期間の内に体系だった学習が出来るように工夫した（表1）。

表 1 陸前高田市広田地区震災状況スタディーツアー計画

月／日	時程と内容
8/16	21:00 八王子駅南口みずほ銀行前集合 21:30 出発（車中泊、2 時間に一度サービスエリアで30分休憩）
8/17	05:30～06:30 気仙沼港付近視察 ＊ 栄町、魚浜町、本浜町、新浜町、東みなと町、西みなと町他 07:30～08:00 朝食・休憩（陸前高田ローソン竹駒店） 08:00～09:00 陸前高田市内災害跡視察 ＊ 一本松と高田松原跡、キャピタルホテル、本庁舎、消防本部、中央公民館、市立図書館、市立博物館、市民体育館、海洋センター、体育館、高田高校、博物館、大船渡線など被災状況視察 09:30～10:30 広田保育園（園長による被災講話） 11:00～12:00 広田小学校（校長による被災講話） 12:00～13:20 昼食（近くの仮設コンビニ） 13:30～14:30 広田地区コミュニティセンター(館長による被災講話) 14:50～15:30 モビリア敷地内 ＊ 広田湾と陸前高田市眺望、モビリア仮設住宅視察 15:50～17:40 黒崎温泉(理事長の震災講話) と入浴 18:00 民宿着 18:30～19:30 夕食 19:30～21:30 学習交流会(参加した社会人との交流)
8/18	09:00 民宿発 09:30～12:00 広田町長洞地区の視察 ＊ 広田地区民生児童委員協議会会長の震災講話 ＊ 「元気塾」の視察と責任者の震災講話 12:30～14:30 仮設店舗群にて昼食後大船渡地区被災状況視察 15:00～16:00 大隅仮設住宅(自治会長の震災講話) 17:00 民宿着 18:00～19:00 夕食 19:30～21:30 学習交流会 ＊ 根岬の津波VTR視聴、体験発表ほか
8/19	09:00 民宿発 ＊ 新宿駅午後 6 時着、八王子駅南口午後 7 時着解散

3) スタディーツアー対象地域の事前学習

前期の基礎学習は、レポートの書き方、図書館の利用、福祉器具の体験、キャリアガイダンスなどが中心だったが、空いた時間を活用して、スタディーツアーに参加する学生、参加しない学生も含めて基礎演習受講生全員を 4 班に分けて、1) 東日本大震災の概容、2) 陸前高田市の震災の概容、3) 広田地区の地勢、産業、文化、過去の震災、4) 広田地区の震災の概容に分けて調査をし基礎演習の時間帯に発表会を開いた。スタディーツアーに参加する学生たちにとっては、津波の大

きさ、災害の範囲、陸前高田市や広田地区の所在地、広田地区の地勢、人口、産業、文化、震災復興後の観光資源などを広範囲に知ることの出来る事前学習になった。合わせて2回にわたって行った、陸前高田市内の仮設住宅調査の結果と広田地区の被災状況とその特殊性についても講義をした。

3 スタディーツアーの実施

注 各被災講話の担当者は、公的機関や組織の長とコミュニティー活動の責任者として行われた講和概要を筆者が纏め、本稿掲載前に講話者に原稿の校閲を依頼した。さらに各講話者からそれぞれの講和概要を本稿に掲載することの承諾書を得ている。講話概要は、報告書としてはかなり長いとは思ったが、学生たちが聞いた貴重な話なので可能な限り詳細を載せた。

3-1 第2日目（8月17日）

第1日目の夜は、9時に西八王子の集合場所に全員が集まり、予定通り9時30分に出発をした。夜行バスなので現地まではおよそ2時間ごとにサービスエリアに入り、1時間の休憩を取り、2人のドライバーも2時間づつ運転を交代した。関越自動車道の高速ツアーバスの大きな事故があったばかりなので、慎重な運転を依頼した。気仙沼市鹿折町には、予定通り午前5時半頃到着し、津波に流され、住宅地に取り残された大型漁船の一つ、第十八共徳丸を視察した。その後、震災で家の基礎と鉄骨だけになった地域をバスで視察し陸前高田市に向かった。

午前7時半に陸前高田市に入り、仮設のコンビニで朝食をとってから、高田松原跡、奇跡の一本松、キャピタルホテル跡、本庁舎跡、市民体育館跡、高田高等学校跡、大船渡線跡などを視察しながら広田地区に向かった。

1) 広田保育園園長による被災講話（09:30am~10:30am）の概容（場所：広田保育園）

震災当日の午後2時45分に子どもたちをお昼寝から起こした。外出を予定していたために早目に園長は仕度をし、いつもより少し早目にこどもたちを起こしたことが良かった。震災当日は、堤防を越えてくる波を見て、保育園の子どもたちの移動を始めた。広田中学校の生徒もお年寄りの手を引きながら保育園の横を通り、高台にある元水産高校の運動場に避難した。その途中で、保育園児も中学生が手を引いて避難した。引き波で保育園に戻った時には、駐車場の車が流され、園内も床30センチほど浸水していた。余震が何度もあり、雪のふる寒い日だった。携帯電話の受信は出来ても送信は出来なかった。その後広田小学校の体育館に避難し、消防署と連絡を取って備蓄の

毛布を確保したが、寒い夜だった。今回で得た教訓は、いち早く高台に逃げたことが良かったことと、親以外には園児を引き渡さなかったということだった。迎えに来た保護者の内1家族だけ津波に吞まれてしまった。子どもを渡すべきではなかった。また、隣家に住む祖母が子どもを迎えに来たが、これはお断りした。その祖母は帰りがけに津波に遭ってしまった。広田半島が津波で完全に孤島になり、3日間水も電気もガスも使えなかった。3日目に漸く道路が繋がり、自宅に戻った。幸いなことに職員は全員無事だった。理事が2名亡くなり、本部も被災してしまったので、園長の判断で、3月20日過ぎに広田保育園の再開を決め、部屋の掃除を始めた。掃除のための水の確保に苦労したが、他県自治体の給水車から特別に水を分けて貰い中庭で子ども用のプールに水をためて、室内の掃除をはじめた。細かな砂がいつまでも残り、悪臭が強く苦労をした。職員も漸く落ち着きを取り戻し、保健所の指導を受けて4月16日からしばらくの間午前中だけ再開することが出来るようになった。職員の中にも被災した人がいたので、無理は極力させなかったが皆良くやってくれた。園が再開されるまで手分けをして家庭訪問をした。先生が来たと子どもらは飛びついてきた。この春に多少の職員の異動があったが、何とか通常開園をして今日に至っている。震災後の子どものケアには、ユニセフの関係者が入り、遊戯療法や、保護者のカウンセリングをして貰っている。同じカウンセラーが1ヶ月続けてきてくれたのが良かった。園が再開してから子ども達は元気を取り戻し、当初は校庭で津波遊びが見られたが、無理に止めることなく見守った。少しずつそういう遊びも見られなくなった。約1年半経ち、仮設住宅での生活が長引くにつれ、仮設の家庭で夜尿、夜泣き、乱暴、落ち着きのなさ、無気力などを訴える家庭が多くなった様に感じる。

2) 広田小学校長の震災講話 (11:00am~12:00noon) の概要 (場所：広田小学校)

震災直後の三月末までは前任者が校長を勤めていたが、定年退職され、4月から(講話者)が校長として赴任した。(講話者も)震災により、高田市内に住んでいた両親を亡くし、現在は仮設住宅に住んでいる。震災後、高台にあった広田小学校には、中学校、地区コミュニティセンターが同居し、校庭には仮設住宅が建てられている。震災直後、小学校は広田地区で唯一使用可能な公共施設ということで、地区本部、避難所、診療所、学校といった「総合施設的な役割」を担っていた。学校再開に向け支えになったことが二つある。一つは、前校長先生をはじめ、当時の職員の方々が一枚岩になって、子どもたち全員の命を守り、職員も全員が無事だったことであった。残念ながら親を震災で亡くした子もいたが、それでも、学校再開ということでは、校舎が甚大な被害を被ることが無かったことも含め、子どもたち全員がそれを待っている、全職員がそれに向かっているということで、「全員が無事だったこと」は何ものにも代え難い大きな支えとなった。加えて、過去の津波を教訓に、津波記念碑が各地に設置されていたり、地域ぐるみの防災訓練や、小中一緒の避難

訓練あるいは地域のコミュニティの雰囲気やつながりなどがあつたりしたことが、結果的に犠牲者を最小にとどめ、学校再開に際して全員登校に結びついたと思う。もう一つは、広田のコミュニティの力強さであった。地区本部をはじめ、避難所の人たちは、子どもたちのことを最優先に考えて、協力的に行動してくれた。校長として、地区本部に相談すると、率先して問題解決に当たってくれた。また、教室確保のための物資等の移動をはじめ、宿直の解消、土・日の閉庁の協力など、地区本部を中心に後押ししてもらうなど、教職員の健康管理ということでも助けられた。震災後の子どもの心のケアとしては、心のサポートチームと連携し、職員研修の機会を適宜設けたり、保護者を対象にした研修会を実施したりした。現在もSCには、定期的に学校に来てもらっているが、学校再開直後は6週間連続でSCに詰めてもらった。子どもたちは、毎日学校があり、学習や活動ができることで安定していった。それゆえ、1学期、2学期は、安全・安心に繋がるように、当たり前前の生活基盤の確保に努めるとともに、職員の健康管理にも気を配った。いずれ、3月11日は毎年やってくただけに、目をそむけることはできない。ニュースや新聞でも取り上げられるので、3学期は、その3月11日をどのように乗り越えさせるかが課題だった。それに向け、「見守りの時期」から「ふれて乗り越える時期」への対応ということの必要性を職員で確認し、子どもたちの心に配慮しながら意図的に「(津波の事に) ふれる場面」を設けた。最近は、子どもたちの間にやや落ち着きのない行動が現れているように感じている。仮設住宅での生活が長引くにつれ、親の仕事の変化や状況が子どもに影響し始めているのかもしれない。子どもたちなりに生活のストレスを感じている。それゆえ、心のケアということでは、回復の個人差さらには、生活ストレスに対していかに対応していくかが、今後の課題である。昨年度は、広田の小中学生の(元気な)姿で地域を元気にしようということで、行事などで出来ることは小中一緒にやってきた。来年度からは、中学校が他の中学校と統合される。今年度は、広田中学校の最後の年なので、思い出に残るような行事が出来るように、諸行事を別々に行うことを確認し合いながら進めている。

＊ 広田小学校長の震災講話の後、車で5分ほどの所にある仮設のコンビニで昼食を取り、再び広田小学校に戻った。被災地の要所要所に仮設のコンビニが出来ているが、品数もかなり揃っていたので仮設住宅に住む方々にとっては、生活の最低の必要品が手に入る心強い民間施設になっていることを強く感じた。

3) 地区コミュニティセンター館長による震災講話(1:30pm~2:30pmの概要(場所: 広田小学校))

3月11日後、ブルーシートにくるまれた13遺体が委託された。棺桶がなかったので、道路が開通してからベニア板を買いに走った。どこも品薄で、ベニアの調達は苦勞した。コミュニティセンターの防災設備はほとんどなかった。どの施設も防災拠点としての価値はなかった。5年ぐら

い前から、ここ10年ぐらいの内に大きな震災が来るという情報が流れていた。3メートル程度の津波とのことで、安心しきっていた反省がある。消防団員も海岸線を走るなど防災に努めたが、住民の中には、「ここで死んでもいい」と逃げない人もいた。消防団員や民生委員などの犠牲者を増やしてしまうことになるので、避難する人たちの協力の姿勢と、消防団員や民生委員は「もう行きます」と言える勇気をもって欲しいと感じた。広田地区には7集落があり、震災後は、地区の公民館長が集まり毎日のように震災の対応策を検討してきた。消防団、防災組織、女性会、漁協女性部、寺の花園会、漁協青年部などの既存の組織に協力をして貰って今日に至っている。被災した人々と被害がなかった人々の間に意見や気持ちのずれが出てきている。時間が経つほど別の問題が出てきている。公共施設の設置を急ぐべきか、仮設住宅の対応を優先すべきか、土地所有者にも当初と状況が大きく変わり始めているので、どうなるか判らない状況。公共施設は、一日も早く高台への移転を願っている。

- * この震災講話のあと震災前まで、オートキャンプ場として使われていたモビリアの展望台から、広田湾の養殖いかだの様子や対岸の陸前高田市を眺望し、住民の迷惑にならないようにモビリア内の仮設住宅を外から視察した。

4) 黒崎温泉事務長による震災講話 (3:50pm~5:40pm) の概要(場所: 黒崎温泉)

陸前高田市が平成14年に温泉権を含む用地を買収し、黒崎仙峡温泉として陸前高田市直営で発足した。見込みの収益が上げられなかったことから、平成18年に市の指定管理を受けて14名の理事からなる「黒崎温泉企業組合」が法人として再発足した。平成23年3月11日の東日本大震災当日は、39名の入館者があったが、全員無事だった。4月5日に電源検査と源泉検査を終え、4月10日に電力が仮復旧したので、5月1日から業務を再開した。6月25日の上水道復旧までは、地元食品工場の井戸水を利用して、市の要請があり、5月から8月までは入浴料を無料にして、広田地区の仮設住宅の入居者を対象に定期的な送迎を行った。のべ14870名が利用したことになる。その他、地元消防団(第5部)に在庫の食料などを提供したり、無料エステやアロマ・マッサージを開催したり、黒崎神社復興祭開催に際して無料のシャトルバスを運行するなどの貢献をしてきた。現在は、通常営業に戻ったものの赤字続きなので、財政の立て直しが当面の課題。

- * 入浴後に民宿に向かい、夕食後学習交流会を開いた。夜行バスの疲れもあったので、短めの社会人参加者との交流をして早めに解散した。

3-2 第3日目(8月18日)

1) 広田地区民生児童委員協議会長の震災講話(9:30am~11:00am)の概要(場所会長宅)

<陸前高田市の震災前の防災活動>

- * 広田半島への入り口付近で、低地になっているために、半島の両側から津波が押し寄せ一時期半島が分断されたという長洞地区を視察後、広田地区民生児童委員協議会長宅をお訪ねし、震災前の防災組織や防災対策、震災直後の様子を講話して頂いた。

陸前高田市には8ヶ町村がある。陸前高田市の平成23年度現在2万3千人(震災前)ほどの人口だった。陸前高田市全域で、「災害時一人も見逃さない運動」をテーマに、行政が中心となり震災前から全国的な防災意識の高まりとともに、民生委員を中心に防災活動をしてきた。震災前は、宮城県沖地震津波を想定した取り組みとして東北各地に自主防災組織ができあがった。陸前高田市の「わが家の防災ガイドブック」もその一環として作成していた。平成8年3月に気仙町今泉地区に最初に自主防災組織ができあがった。今回の津波では、気仙川沿いに約4キロ付近まで波が逆流して大きな被害が出た。その途中にある今泉は、2キロほど行った所の左側地区で、Yというスーパー・マイヤの創設者がその地区のコミュニティー推進協議会会長をしていたこともあり、平成17年3月までに、高田、小友、広田など海岸に面した市町村で自主防災会が結成された。自主防災会は、そもそも昭和34年9月26日の伊勢湾台風の被害をきっかけに国が災害対策基本法を制定したことに始まり、その第8条2項の十三によって作られることになった。その活動の一環として陸前高田市では地震、津波、風水害などに対応するための「わが家の防災ガイドブック」を作成した。その中の津波に関するところを抜き出し、民生委員が中心となって、「自らの判断で高台へ」、「情報は避難してから」、「第一波で波が小さくとも第2波、第3波で大きな波が来る可能性が高い」などの印刷物を事前に配布していた。

<防災マップ、安心カードの作成>

また、高田市の取り組みの一環として広田町でも各家に防災マップを作って配った。残念ながら、広田中学校やコミュニティーセンターも、避難所だったが、今回被災してしまった。民生委員が中心になって、N氏を講師に招き各地区ごとに自主防災会の会長や女性会や老人会の代表が集まって、「支え合いマップ作り」を行った。具体的には、防災マップ上にお年寄りや独居老人などの要支援者を書き入れ、誰が深いつながりがあるかを書き入れて行った。合わせて、近所の誰と親しいか、寝室はどこか、いつも居るところはどこか、どんな病状かなど要援助者の「安心カード」も作った。阪神淡路の震災でもこういったカードが役に立ったとのことだったので参考にした。

<震災当日とその後>

こういった防災対策をして、正に防災訓練をしようとしていたときに震災になった。広田地区で

も大きな災害を受けたが、幸い半島側は、一人も犠牲者が出なかった。防災マニュアルに従って活動した陸前高田市の消防団、市役所の職員の多くがかなりの犠牲者を出した。高田地区の83名の民生委員の内11名がなくなっている。広田地区でも要介護者を確認に行った民生委員が一人亡くなっている。事前の防災計画や安心カードがあったことから、被災救出者の98%は、自主防災会の活動によって救助された。3月11日の地震そのものでは、この地区は大きな被害はなかった。むしろ内陸部の方が地震の直接被害が大きかった。

＜陸前高田市の民生委員の対応＞

＊ 岩手県警の撮った上空からの津波の状況をVTRを視聴

防潮堤を越えてくる波を見た中学生の知らせにより、中学校に避難していた避難民は、保育園の脇を通して元の水産高校の校庭に避難したので全員が無事だった。子どもたちを迎えに来た保護者に渡すよりも津波警報が収まるまでは、安全な避難場所にいる方が安全である。高田市内死者987名、気仙町死者197名、広田半島は死者41名、広田半島の先の方は、津波の被害がなかった。長洞地区は、かなり被害があったが、死者は一人も出なかった。そのとき地区の民生委員は、走りながら津波を知らせ高台の公民館に避難させ、担当地区の要援助者を見回った。民生委員も避難所生活をせざるを得ない人が多かったが、その中でも民生委員としての仕事をせざるを得なかった。亡くなった民生委員の代わりの民生委員を申請し、定数83名が揃ったのが12月に入ってからだった。正式な民生委員になるまでいろいろな手続きがあるので、生活指導相談員という身分だった。社会福祉協議会は、会長始め副会長、事務局長、次長が亡くなり、大事な資料も全て流されてしまったので、ほとんど機能出来なかった。3月26日に漸く組織が整って、毎月10日に会議を開くようになって今日に至っている。生活支援相談員が毎日の様に仮設住宅を回るようになった。

＜広田地区の民生委員の震災対応＞

自主防災組織、消防団員が協力して、内陸と通じる道路を切り開いて、必要なものを買い出しに行った（葉、ミルク、おむつなど）。女性会は、お米の抛出、発電機で粳を精米し、炊き出しをして60軒の家族に配った。助け合いの盛んな地区だからできた。トイレは皆水洗になっているので、使えなかった。畑に穴を堀り、ブルーシートで囲って簡易のトイレを作った。長洞地区の子どもを集めて、学校が再開される4月15日までの間有志が「元氣塾」を開設した。学校の絵や看板を書くのをボランティアが来て援助してくれたり、子どもたちに笑顔をとの願いで学習や体操などのいろいろな活動をした。避難所の介護ニーズ調査をして保健師や自主防災会、災害ボランティアセンターなどに繋げた。要介護者は、信頼関係のある民生委員でないと心を開いてくれない場合がある。民生委員は、男女の組み合わせで活動した。仮設住宅が出来た段階では、「お茶っ飲み会」一サロニーを開いて、部屋にこもったり、孤立しないように、安否確認をしたり健康管理に関わった。

呼び水役から参加型の組織を作るように心がけた。仮設住宅の入居者調査を行いボランティアセンターとの連絡調整を行った。今回の津波被害からの教訓として、避難者がそれぞれ自主的に判断をする「津波でんでんこ」の考え方や、津波警報が解除されるまでは、家に帰るよりも学校や保育所に居た方が安全という意識などの防災教育を徹底したい。

＜避難経路の体験＞

- ＊ 民生委員児童委員協議会長の震災講話の後、被災者の一人に、当日津波からどのように逃れたかを話を聞きながら、避難経路を実際に辿った。

避難者宅の玄関前に裏山に上がる道があり、数分で高台に上がった。足腰の弱い人にはやや急な勾配だった。高台からは海や低地が見渡せるので、津波が来る様子や津波で民家が流されていく様子が見えた。自宅の前の家の後ろで風をしのいでいたところ、直ぐ側の電柱が倒れるのが、見えた。その家の住人らに声をかけながら、さらに上の方へ逃げた。その直後にその家は、津波で流された。電柱が倒れるのを見ていなかったら、家と一緒に流されていたかも知れない。高台に登って九死に一生を得た。

2) 「元気塾」のG提案者からの震災講話(11:20am~12:20pm)の概要(場所:長洞元気学校跡)

震災当日は、体育館で中学校の卒業式準備の最中だった。担任をしていなかったので職員室にいた。スチールの机の引き出しが飛び出してきた。揺れが酷くなり押さえているどころではなく、電話機の近くにしがみついていた。停電になったので、体育館に避難した。体育館の天井のライトが大きく揺れていたのが気になった。携帯電話を持ってくるのを忘れてしまった。他の先生方が携帯電話でやりとりをしていたが暫くして通じなくなった。そのうちに校庭に出て高台に逃げるように声が聞こえてきたので、夢中で校庭に出て走った。後ろを振り返ると、右手遠方の堤防から大きな津波が流れ込んでくるのが見えた。保育園脇を通過して旧水産高校の校庭に逃げた。津波が収まってから消防団員に誘導されて、広田小学校に避難した。翌日自宅に戻ったが家が流されてしまっていたので、近くの民家に避難をさせて貰った。家を流されてしまった人々は、同じように、災害を免れた民家に分宿避難をした。電気はなかったが、それぞれ山から水を引いていたので水は何とかなった。熱源は、練炭、こたつ、反射式のストーブ、薪ストーブ、プロパンガスがあってとても暖かった。3月15日に、救援物資が届くようになるまで食料は、各家庭のお米を出し合っただけだ。班ごとにまとまり、震災後暫くは班長さんの家で炊き出しとおにぎり作りに加わった。洗濯は、山の水を使って手洗いで干したが、3月下旬でも洗濯物は凍ってしまった。住民は、それぞれに役割を持って助け合った。若い人たちは、道路が復旧してから、生活に必要なものを買出しに行くなど皆がそれぞれに何かをやっているのに、おにぎりを握りに行くだけでいいのかなと思ひ

始めた。ケネディー大統領の就任の挨拶で「国があなたのために何をしてくれるのかを問うのではなくて、あなたが国のために何をするのかを問いなさい」ということを思い出し、教師の経験を生かして、子どもたちのために何か出来ないかと考えた。ご主人が民家を借りて場所を確保してくれたので、地区のお母さんがたの協力を得て子どもの学習支援の活動を始めた。午前8時30分から12時までの午前中だけの活動だったが、学校が始まるまで小学校1～2年生を中心に上は中学校3年生まで30人ぐらいのこどもが集まった。聞き伝えて、近隣の子どもたちや、今年から小学校に上がる子どもも時々加わった。名前を「長洞元気塾」とつけた。活動の内容は、始めにランニングをして、国語、算数、体育(長縄)を組み合わせ、途中でゲームをするなどして最後に掃除をして12時に終わった。土日は、休みにした。「元気塾」がテレビやラジオでも取り上げられるようになり、ボランティアでエアロビの指導者が来てくれたり、歯科医師が虫歯予防の紙芝居をしてくれたり、沢山の文房具や本、灯油やお菓子の寄付があったり、一関の高校生たちからは募金活動の義援金を頂いた。

海岸線で津波後には通れなくなっていたところがあったので、遠回りだが50年ぐらい前の避難路である山道を通して小学校に行く道を整備して、登校前の4月12日にモビリアまでの体験通学を皆でした。4月15日に閉校式をした。4月20日から小学校が始まった。子どもたちは、学年ごとに小さなグループに別れて学習をした。中には教科書を流されてしまったこどももいたので、お互いに見せ合った。勉強時間は、1時間ごとに区切りをつけ、挨拶をして休憩に入り、最後には掃除をして帰宅した。中学校3年生は高等学校が始まるまで、ボランティアとして手伝ってくれた。この地区は、比較的古いコミュニティーがまとまっていることもあり、近所の人たちもおやつを持ってきたり、見学にくる人も出てきた。子ども達は、最初はおとなしかったが、次第にけんかを始める子どもも出てきた。我慢が発散できて喧嘩もいいなと思った。周りは、この活動に好意的に見てくれていた。公営住宅、集団移転などの見通しが立っていないので、年齢的にそのあたりがとても気になっている。これから先の生活の場が気になる。

3) 大船渡市末崎地区の被災状況の視察と仮設店舗群での昼食 (01:00pm~02:30pm)

＊ 次の予定までに時間があつたので、大船渡市末崎地区の被災状況を視察することにした。

末崎地区は、大船渡市被災地区のほんの一部だが、瓦礫が撤去されただけで復興の気配は、殆ど感じられなかった。仮設店舗群が出来ていたのも、学生たちはそれぞれ好みの店舗に入り昼食を取ってから陸前高田市に戻った。筆者が入ったお好み焼きの店では、偶然にも法政大学市ヶ谷図書館の職員一行と同席だった。法政の教職員や学生がいろいろな形で被災地支援をしている話を聞いて嬉しかった。

4) 陸前高田市K仮設住宅区長の震災講話(03:00pm~14:00pm)の概要

仮設住宅に移る前は、高田一中の避難所にいた。1200人もの避難民がいた。地震の当日は、高田市内のマイヤー（スーパー）近くの自宅にいた。次男が前日熱を出して寝込んでいた。普通だったら仕事場に迷惑をかけないように行きなさいと言うところを、行って迷惑をかけると行けないので休ませていた。遅い昼食を作って次男と食べた直後に地震が来た。高いところに置いたものが落ちて足の踏み場もないほどに揺れた。地震そのものの被害はそれほど大きくはなかった。長男の妻と子どもの無事を確認して、家から出ないように伝えてから、市内の実家の母の様子を見に出かけた。長男は消防車に乗って水門を閉めに行った。母の無事を確認してから、知り合いが入院をしているので病院に行くことにした。次男から3メートルの津波が来ると言われ、今日は病院から戻れないかも知れないと思い、何かあったら高台に逃げるように伝えてから県立病院に行った。後で判った事だが、結果的に次男は、姪と兄嫁を連れて高台に逃れたが母は津波に吞まれてしまった。次男は、祖母と叔母を助けられなかった事をかなり悔やんでいたもので、正しい判断だったと励ました。病院では、激しい余震で大混乱だった。水を持ってくるのを忘れたと思い、売店に買いに走ったがだれもいなかったの床に転がっているペットボトルを何本か持って来た。災害に乗じて盗んでいると思われるのは嫌だったが、とっさの判断だった。そうこうするうちに自転車置き場の屋根が見えなくなり、水かさぐんぐんと上がってきたので、屋上に駆け上った。既に4階まで水が来ていて若いお医者さんたちが、首まで水に浸かりながら患者さんを屋上に運んだ。すごかった、偉い人たちだなと思った。屋上に上がると津波が高田松原や家々をのみ込んで行くのが見えた。映画を見ているみたいだったが、現実なんだと思った。院長とは懇意だったので、こんなに大きな津波だと救助が来るのに時間がかかると思い、長引くつもりで対策を考えましようと話した。水が引いたのを見計らって、ものすごく冷たかったが水の中を歩き回って、ポータブルトイレを持ち出したり、カーテンを引きちぎったり消防用のホースをはさみで切ってロープ代わりに使って屋上に仮設のトイレを作った。明るい内にトイレを済ませるように皆に促した。乾いたパジャマを見付けてきた看護婦に指示を出していたので、知らない人は、（講話者を）病院のスタッフのように思っていたらしい。屋上にいてものすごく寒かったので、ゴミ袋を被って仕事をしていた。お医者さんや看護婦さんは、紙おむつを首に巻いたりして寒さをしのいでいた。コンクリートは、かなり冷えたので、段ボールを見付けて敷いて座るように工夫した。紙おむつを切って靴の中に入れると暖かくなった。医師にも率先して紙おむつを靴に入れるように勧めた。翌日には、救助ヘリが来た。夕方3時頃までかかって患者さんや避難者の救助にかかった。（話者も）ヘリで救助された。途中高田全体をヘリで見せてもらった。

高田一中の避難所で、長男を探したが見つからなかった。他の避難所も探したがどこにも居な

かった。一睡もしていなかったのでそのまま爆睡してしまった。長男は、大船渡の病院に入院していることが判った。長男は、低地の避難所を回って、高台に逃げるように言って回った。聞き入れた人は助かったが、避難所だからと過信をしてそのまま残った人は、津波の犠牲になった。長男は、津波に吞まれたが、家族を残して死ねないと思い、頑張っていたら潮の流れが変わって何とか助かった。3度も死ぬところだったとのことだった。息子が生きていなかったら避難所のボランティア活動などしなかったと思う。

第一中学校の避難所では、息子が生きていることが判った5日後からいろいろなことをやり始めた。仮設トイレに皆靴のまま入り、その靴のまま体育館の中に入っていくので、とても不衛生だった。一緒に来ていた年配の女性たちが自主的にトイレの掃除をしていた。臭いも強くなってきたので、体育館に行ってトイレ掃除の班長に自主的に立候補し、ボランティアを募った。何人が集まってきたがそれでも足りないので、各区ごとに人数調整をして、当番制で朝夕掃除をすることに決めた。外から来た人たちの感想では、他の避難所に比べて、第一中学校のトイレはとてもきれいだったとのことだった。

5日目の23時頃、タンカが運び込まれ騒がしくなった。75歳以上のお年寄りのために昼間畳を置き、その上で毛布を引いて寝ていた女性が心筋梗塞で畳から落ちた。誰も付き添いに行こうとしなかったのも、自主的に救急車で病院まで一緒に行った。挿管され、心筋梗塞の手術をすると医師が言ったが、脳死状態だったので、私がお主人に手術をあきらめて貰った。40分ぐらいで息を引き取った。ご主人を介抱をしてから、交通の便がなかったので、病院からは、かなりの距離をヒッチハイクで一中の避難所に戻った。震災後6日間は、ゆっくり寝ることはなかったが、今思うとよくやったと思う。被災しなかった中学生と高校生が毎日避難所にボランティアで来ていたので、いろいろ頼んでとにかく暫く寝ることにして、爆睡3時間でボランティアの仕事に戻った。

本部の仕事を終え、体育館に戻ると小学生の男の子が、不自然に体を揺すっていたので、側に行き行ってハグをしながら事情を聞こうとしたが、放って置いてほしいというので、そのまま寝かせた。次の朝その子の祖母に事情を聞いたところ、両親が津波でながされ、親友が亡くなったとのこと。その日から、体育館でその子と遊び、後日巡回カウンセラーに繋がった。避難所では、出て行く人の記録（家族構成や行き先など）を整備することの大切さを感じた。避難所には、バイクが必要。ノロウイルスとインフルエンザの予防のために手洗いと衛生管理がとても大事と感じた。

その後5ヶ月間の避難所生活を続けてきて、漸く小さなコミュニティーができあがってきたところで区割り解体されてばらばらに仮設住宅に入居することになった。今いる仮設住宅は、幹線道路からかなり奥まった所にあり、当初12世帯しか入居していなかった。全部が埋まったのは9

月上旬の事だった。いろいろな避難所からやってきた人と一日も早くなじむために、協力をして各家族の紹介をしながらバーベキューをした。いくら呼びかけても出てこない人は、無理強いしなかった。集まる人たちで楽しく過ごすことにした。やはり集まることが必要だと思って別に土地を借りて、ライオンズクラブからテントを借りて元気ハウスを始めた。元気ハウスでは、毛糸を使った小物を作って売り出したところかなりの反響を呼び、収入にも繋がる企画になった。集まる、おしゃべりをする、作業をする、収入になる、自宅に帰ってもやる可能性があるということで取り組んでいる。今は、毛糸を編めない人のために元気食堂を開こうと思っている。仮設に移るとボランティアで来る人が極端に少なくなった。これから住居がどうなるのか不安。元気ハウスの側にみんなの家という集会所を作って貰った。七夕や太鼓をたたいたりいろいろな催し物をして、仮設住宅にいたる間は皆と楽しくやりたい。

- * 普通の家庭の主婦であったが、避難所生活期間中のリーダーシップが評価され、仮設住宅の自治会長に推挙されて今は区長をしているとのこと。「組織に属している人は、上からの指示を待ってから行動せざるを得ない」、「組織に属していなかったからこそ、自分が感じたり思ったまま行動が出来たのだと思う」との言葉が印象的だった。

5) 民宿での反省会(8:00pm~9:00pm)

夕食後、民宿の主人が撮った根岬の津波の様子をVTRで視聴した。かなりの強行スケジュールだったので、反省会を取りやめて自由時間にした。

- * 翌日は、朝9時30分に宿を出発し予定通り、午後8時に八王子駅南口で全員無事に解散した。

6) 基礎演習での報告会

参加した学生たちを3人ずつ3班に分けて、スタディーツアーに参加出来なかった学生達のために後期の講義の中で報告会を開いた。

4 スタディーツアー終了後の学生の振り返り

注 学生のレポートを分析するにあたり、提出した学生の文書による了解を取り、かつ個人が特定されないように配慮した。

スタディーツアー実施後、体験の振り返りのレポートを学生に書いて貰った。レポートは通常、授業評価を意識して書かれることが多いが、スタディーツアーに参加しない基礎演習生が半数いたこともあり、レポートを提出しても基礎演習の評価に反映されないという条件でレポート提出を依

頼した。分析の方法は、それぞれのレポートの記述を意味のある文脈に分解し、同じような内容をまとめた。それぞれの項目には、代表的な例示記述を掲載した。また、例示記述は臨場感を大事にするために、なるべくそのまま転記した。さらにレポートを提出した個人名が特定出来ないように配慮した。なお例示記述の下線部は、筆者がつけた。

① これまで現地を訪ねる機会がなかったので参加した。スタディーツアーの企画は、貴重な体験だった。

* 「翌日の新聞やテレビを通して報じられる被災地の状態や人々の様子を見て、これが映画や夢などではなく、現実のものとして隣県で起こっていることだとは信じられなかった。同じ東北に居る者として何か出来ることはないのだろうかと思いつつも具体的な活動は出来ないまま一年が経ってしまった。現地の様子もカメラの狭いアングルの中に映るものを知るのみであった。そして、甚大な被害をもたらした、連日のように情報が提供されていた東日本大震災も今では風化してしまったように思われる。そんな中、ゼミで陸前高田での合宿が行われることになった。震災について学び、伝えていくにはこの機会を逃してはいけないと思い、参加することを決めた (学生A)」

② 被災の実際に触れて被害の大きさを体感した。

* 「現地に向かうバスの中では正直な気持ち “めんどくさい” だったり、“やっぱり参加しなければよかった” などと、軽い気持ちで参加した事を悔いていた。その気持ちは約8時間の移動時間の間変わる事は無かった。しかし朝方、バスの車内が寝静まっている頃、気仙沼に到着した。薄明るくなった窓の外の景色を確認して、筆者は驚いた。驚いたという表現は軽薄なような気もするけれど、単純にそう感じた。なぜならば、辺り一面、人が住んでいるような建物が一つも無かったからである。いくら地方であっても見渡す限りに建物が無いなんて事はまずあり得ない事だと思うけれど、その場ではあり得ていた。土台だけが無惨に残り、土台から上の建物の部分は奇麗に消え去っていた。また報道等でよく目にする機会があった、陸地に乗り上げた漁船も目前で見る事が出来た。一見、オブジェクトとしてその場に置かれたのではないかと思う程自然に存在していたが、もちろんそういう訳ではなく、津波で運ばれてきた物である。筆者はその打ち上げられた漁船を自分の肉眼で視界に捉えた時に車内で持っていた “めんどくさい” や “来なきゃ良かった” などの考え方が無くなっている事に気づいた (学生F)」

③ 災害の大きさ悲惨さ、怖さ、むなしさを感じた。

* 「私の記憶によく残ったのは、土台だけとなってしまった民家の一つ一つに、少ないけれど

ちんと花が供えられていたことである。それらは、今でこそ建物も数えるほどしかなく、人気も少ないが、被災する前は自分が住んでいる町と同じようにたくさんの人々がそこで生活を営んでいたということを教えてくれた。そこには、ほんとうに大勢の人がいたのである。災害による悲惨さ、怖さ、虚しさを感じた。また、市街地を抜け海沿いに進んでいくと、津波により松林が流されたものの一本だけ松の残った「奇跡の一本松」を見ることができた。荒涼としたなかに一本だけ立つその松の木はなんだか寂しいような、それでいて逞しいような、不思議な感じがした。その松は陸前高田で起きた悲劇と、それに負けない現地の人々の強さを表している、そんな気がした（学生D）」

④ 1年半経っても復興の様子が殆ど認められなかった。復興には相当の時間がかかると感じた。

* 「初めて現地を訪ねてみて、一年半経って被災地をもとに戻すための作業はこれほどしか進まないのかと感じた。街中に散らばっていた瓦礫を除けて自動車を通れるようにしたり、津波にのまれてしまった人の遺体を移動したりすることが現時点で出来ることのようにだ。「がんばろう東北」「復興〇〇」などという言葉を目にすることが多いけれども、地盤調査や震災での津波を教訓として同じことが繰り返されないような町づくり上の対策の必要性をふまえると、元の生活ができるようにするにはまだまだ時間がかかりそうだと思った。また、被災地以外の地域の力を借りなければ復興は難しいようだ（学生A）」

* 「今回のツアーでは感じたことは、1年5カ月経ってもいまだ整備は行き届いていないという状況であるということを改めて実感した。破壊されたままの建物、でこぼこの地面、いまだ仮設住宅に住んでいる人がまだまだ沢山現実である。今回の地震での復興は数年で解決できるものではなく、さらに多くの時間をかけるものとなると実感した」

⑤ 被災地を訪ねること、被害に実際にあった人たちの話を聞く事もサポートの一つと感じた。

* 「被災した人の話を聞いていくうちに少しずつ当時の姿が見え、震災という思い出したくない出来事を話してくれる人々に心の底からありがたうという言葉が言いたくなった。ツアーが終わり家に帰宅する際、“震災地の人々の話を聞くことも一つのサポートなのだ”と思った。いつかまた震災地へ行ってサポートするためにもボランティアの知識をしっかりと身につけたい（学生G）」

⑥ 被災を受けた子どもたちの心のケアが大事だと感じた。

* 「広田保育園、広田中学校で共通して感じたことは、「子供の心のケア」の必要性である。子供達の中には家や家族を失った子もいれば、被害がほぼ無しに近い生徒もいたため、対応が難しかったが、ユニセフからカウンセラーを派遣して頂いたくなど様々な手段を必要とした。広田中学校では学校側から震災の事については触れず、子供達が自分の中である程度消化するまで

はのびのびさせることで、深刻な問題は起こらなかった。ただし、毎年必ずやってくる三月十一日という日はやはり、色々な感情が思い返してしまうことがあり、不安とのことだった。筆者は臨床心理を専門にしている訳ではないが、まだ幼い時期に未曾有の自然災害に見舞われてしまった子供の心理が今後どのように影響してしまうのか、それを食い止めるにはどのような事が有効なのか、について考えてみる必要があると感じた（学生F）」

⑦ **働く人たちの責任感や広田地区の市民やコミュニティの強さが人的被害を少なくしたと感じた。**

* 「広田保育園では、園長先生から当時のリアルな話を聞かせていただいた。津波が押し寄せたとき、園長先生の懸命な判断で園児を安全な場所へ避難させることができたそうだった。非常事態での情報、また、園児に対する責任、これらが園児を守ったのである。また、校長先生の話では民間の方たちの団結の強さに驚かされた。被災した当時の小学校での避難所生活では学校の関係者が指揮をとるのではなく、市民の方々が率先して物事を進めていたそうだった。元々、この地区の人々は結びつきが強いそうだった。昔から漁業で栄えてきたこの地域ではお裾分けの文化が浸透していたし、子供たちは血が繋がっていない年上の子供のことを「お姉ちゃん」「お兄ちゃん」と呼ぶらしい。そのような普段からの仲の良さが災害時の団結の強さに繋がったのだらう（学生D）」

* 「広田地区のコミュニティの強さが、震災後の学校再開に多大な影響力をもたらしたという話を聞いた。地区の人々が子供達の事を第一に考え、通学路の設定や子供の遊び場などを確保してくれたことによって、子供達は多少は落ち着いて過ごせた。また子供達がこのように緊急事態にも臨機応変に対応できたのは、昔に起きた大津波からの教訓が石碑に刻まれ、対処を徹底してきたからである。普段からの地域の繋がりがこのような場合に活きたのである（学生F）」

* 「広田小学校は震災後、避難場所となり当時の総合本部のように多くの人が集まった。一中略一小学校を再開するのは場所の確保が困難があったが、小学校に集まった町内会の人々が学校再開に力を貸してくれたため再開が可能となった。このように広田町ではコミュニティの強さが被害を少なくさせた一番の理由であると思われる（学生C）」

⑧ **カウンセリングの効果を感じた。**

* 「広田保育園、小学校ともにユニセフや市から派遣されたスクールカウンセラーの導入をしていた。広田小学校の方では生徒たちのなかで、落ち着きがなくなった生徒が何人かいたと小学校の校長先生は語った。トラウマを持つのは子供だけではない。被災を受けた人の中には海が怖くなり、海を見たくない人が出たという話もあった。広田小学校の場合には教員に向けてのカウンセラーも行っていた。また、校長先生の話によるとカウンセラーによって多少気が紛れ

て楽になった人が多く、カウンセラーと話したいという人も増えたという（学生C）」

- ⑨ 何度もくり返されてきた津波被害の伝承と津波への意識や備えが広田地区の人災を少なくしたと感じた。

* 「「広田町は過去に大きな地震を過去に何度か経験しており、津波による口伝が多くあり避難につながったと思われる。今回のツアーで泊まった民宿の近くにある石碑にはこう書かれてあった。「地震があったら津浪の用心」「それ津浪機敏に高所へ」「低いところに住家を建てるな」「津浪と聞いたら欲捨て逃げろ」と刻まれていた。この石碑は昭和9年3月3日の津波を記念にして建立されたものである。津波の多い地区独特のものであり、住民が津波を意識していたことがわかる（学生C）」

- ⑩ 今からでも役立てることを実行していきたいと思うようになった。

* 「訪れる前はもっとしんみりした雰囲気なのかと思っていた。しかし、現地の人々は活気にあふれており、むしろこっちが元気づけられるほどであった。悼むことは大切な事である。しかしもっと大切なものは今一生懸命生きている人々の生活である。「東北の人たちはかわいそうに」などと悲しんでいるだけじゃなくて、行動を起こすことの大切さを感じた。被災からすでに1年経った今でも手伝えることは山ほどある。今できる事はなにか？具体的に考えて積極的にそれらを実現していきたい」

- ⑪ 地震や津波などの自然災害には、日頃からの具体的な対策が大事だと思った。

* 「「地震大国と言われる我が国日本は、また大地震に見舞われる可能性が0ではない。これから起こりうる地震への心構えを今回伺ったお話から学ぶことが出来た。まずは、コミュニティの重要性である。以前より地震や津波への対策を練り、避難上弱者の立場になる人を助けるためにどうするのかを考えるといったように、地域として被害抑制のために活動を取っていたことを知った。普段よりコミュニケーションをとり、ここにはどのような人が住んでいるのかを把握しておくこと、そしてその土地についても知っておくことが避難する際に必要な知識であると思った（学生A）」

* 「「近年、大規模な地震が発生すると想定されている。政府だけでなく、自治体や自分自身で身を守ることも今後必要とされる。多くの負傷者、犠牲者を出さないため、心に傷を負った人を増やさないためにも多くの地区は広田町のように自治体の力を強め緊急時に迅速な対応がとれるようにし、みんなで協力して助け合っていくことが大事だと著者は思った（学生C）」

- ⑫ 同行の社会人との交流も有意義だった。

* 「「同伴された方々との対話も非常に有意義なものであった。筆者より経験豊富な方の話は見習うべき箇所が多く、筆者に話してくださったこと以外にも、被災者の方々の話を聞く際の姿勢

に始まり、質問の仕方やその内容など参考にしたい点がいくつもあった。特に何度も頷いて話を聞いている姿は、聞き取ろうという意思が筆者にも強く伝わってくるものであり、自身も取り入れられるようにしたいと思った（学生B）」

⑬ 内容の濃いツアーだった。大学1年生で参加出来て良かった。

* 「振り返ってみると非常に内容の濃いツアーであった。自身の多くの改善点を見つけれられたことを考えると、大学生という今回では最も年齢層の低い立場として参加できたことは幸運であったといえるだろう。（学生B）」

⑭ 学部でフィールドワークを重視するわけがわかった。実際に見聞きすることによって随分と被災地の考え方や思いが変わった。

* 「実際に目で見て、耳で聞き、自分なりに噛み砕いて理解し、想像するといった行程を踏まえた上で改めて考えてみるとずいぶんと考え方、思いが変わっている事に気づく事が出来た。普段の授業でフィールドワーク、実体験の重要性について、の講義があっても、漠然と聞いていただけであったが、なぜ先生方がフィールドワークを重用視するのが見えたスタディーツアーでもあった（学生F）」

⑮ 周りの人に、実際に被災地に行くことを勧めるようになった。

* 「このスタディーツアーは必ず今後の筆者の進路や人生について重要な分岐点になったと感じていると同時に、身の回りにいる人に、実際に被災地に行ってみる事を勧めるようになった。

様々な点で勉強になり、また成長できたスタディーツアーになったと感じている（学生F）」

統計的、客観的な評価ではないが、参加した学生の固有の気づきや意味づけの内容から、予想以上の成果を上げ得たと感じている。

5 基礎演習を対象にしたスタディーツアーの構成因

「基礎演習」としての試行的フィールドスタディの企画過程と事前学習、スタディーツアーの実施経過、スタディーツアー終了後の学生の振り返りの検討から、被災地スタディーツアーを成功裏に実施するには、次の様な構成因を指摘することができる。

1) スタディーツアーの目的を明確にする（目的因）

スタディーツアーを実施する場合、学生は、現地に出向いて直接さまざまな事象を見聞きしながら自由な体験をする。対象が学部1年時の基礎演習の学生であることから、学生たちのさまざまな体験を効果的に意味ある自己学習に繋げるために、実施者は、目的を明示しておく必要がある。広田地区は、昔から主要な産業が漁業と農業で、未だに「よいとり」という結いの文化が強く残っ

ていて、昆布漁やほたての養殖作業での共同作業、虎舞を初めとする季節ごとのさまざまなまつりごとや諸行事などが、婦人会や消防団、防災組織を通じて「よいとり」の文化として根付いている。今回の試行スタディーツアーでは、大きな震災にもかかわらず、比較的死者や行方不明者の少なかった要因となっている「震災時のコミュニティの力」を学ぶ事を目的にした。ツアーの名称を「よいとり」にしたのもこのためである。

2) スタディーツアーを目的に沿って内容を整える（内容因）

広田町に焦点を絞って、災害の大きさや、コミュニティの力を学習するために、まず地理的な概要と震災の程度を体感するために、気仙沼市の被災の様子を見ながら、陸前高田市の被害の詳細を視察し、講話の合間を縫って大船渡市の被災の一部を視察する機会を組み込んだ。また、広田地区では焦点を絞りやすいように、震災を体験した子どもへの対応に焦点を当てて、保育園長、小学校長、地域のコミュニティセンター長、民生児童委員協議会長、元気塾発案者にそれぞれ1時間づつ講話をお願いした。また、避難所の様子や仮設住宅の生活の様子などを自ら被災した大隅仮設住宅の区長に講話をお願いした。また、強行なスケジュールの中でほっと出来る内容も必要なので、広田半島の黒崎温泉の事務長にも講話をお願いし、講話のあと温泉での入浴の時間を組み込んだ。また、それぞれの体験を意味ある学習に繋げるために、交流会と振りかえりの時間を設けた。今回は、学生の参加費を安く抑えるために、6名の社会人（教員、指導主事、公立障害者施設長など）に参加して貰ったが、社会人との交流は、はからずも学生たちの体験の幅を広げる機会になった。今回は、短期間の内に広い範囲の災害の様子と限られた地域の震災対応を効率よく学習するために、視察と講話が中心であったが、時間的にゆとりがあれば実際に体を使うようなボランティア活動や、仮設住宅に住む方々との対話や交流もしたかったが、割愛した。

3) 綿密な事前調査をする（事前調査因）

一定の期間の中に、効果的な内容を整えるためには、企画者は、現地の被災状況、災害跡地の視察ポイント、文化、産業、人的資源にある程度精通している必要がある。そういった意味では、「陸前高田地域再生プロジェクト」の3泊4日の現地調査に2回にわたり参加したこと、定期的に行われるプロジェクトの研究会や報告会、作成された報告書などは、スタディーツアー企画のための事前調査の代わりになった。沢山の人が押しかけて、被災の話をするのもうんざりすると言う声も聞こえる中で、地域の施設の長や地域の組織の長に講話を頼めたのも、二度にわたる「陸前高田地域再生支援プロジェクト現地調査」に参加した時の人脈があったからだと思う。

4) 学生の参加しやすい経費にする（経費因）

今回のスタディーツアーでは、さまざまな工夫をして総経費を3万3千円に抑えたがそれでも基礎演習の参加者は半数以下に減ってしまった。スタディーツアーの対象地が遠いので、一人あた

りの経費を3万円以下にするのは極めてむずかしかったが、入学をしたばかりの新生入生にとっては、かなりの出費なのだと思う。宿泊日数や距離にもよるが学生一人あたりの経費を2万円以内に抑えることが出来れば、参加者はもう少し増えたかもしれない。学生の経費削減のために、2012年度法政大学東日本大震災復興支援研究助成金を申請したが、助成金の趣旨に合わないとはねられてしまったのはとても残念だった。

5) 宿泊日程にする(宿泊因または期間因)

スタディーツアーの1日の体験を振り返えったり、振り返りを分かち合いながら交流をすることは、固有の気づきや発見を学生1人ひとりの意味ある学習に繋げる要なので、可能な限り宿泊を伴うツアーにしたい。今回は、遠距離でもあり経費の制限もあって、車中1泊、民宿2泊にしたが、学生仲間の交流や同行の社会人との交流に意義を見出す学生も多かった。スタディーツアーの適度な長さや期間、宿泊形態も大事な要素になる。

6) 参加意欲を高める(動機づけ因)

スタディーツアーで効果的な体験をするためには、ツアーそのものへの参加動機を高める必要がある。東日本大震災は、特異な状況だけにそれだけで現地を訪ねてみたいという気持ちが起きやすいが、単なる興味や関心を満たすだけのツアーで終わらせないためにも、また学部1年生であるということからも、スタディーツアーとしての効果を高めるためには、達成可能な課題意識や主体的な参加意欲を高めながらスタディーツアーへの動機づけを工夫する必要がある。今回は特別演習の受講生の発表力や発表内容の構成力を高めることを目標に、履修生を①東日本大震災の概要、②陸前高田の津波被害の概要、③広田地区の文化と産業、④広田地区の津波被害状況の4グループに分けてテーマごとの事前調査を行った。被災地の地理的状況や新聞やテレビで報道された被災状況の事前学習が現地視察でかなり役立った。また、ツアーに参加しなかった学生も事後の報告会で、ツアー参加者の体験を共有することに役立った。

7) 不測の事態に備える(事故対応因)

フィールドツアーには、事故や病気などの不測の事態への対応は担当教員にとってかなり重要な要因になる。学生の校外授業の届け出をして、最低限の実習障害保険などの適用を受けられるようにしていくのは当然のことだが、このほかに往復の交通については、資格や約款のしっかりした観光会社のツアーバスをチャーターした。特に行きは夜行だったので、プロのドライバー2名を確認した。現地での病院については、現地での救急病院を確認して出かけた。また、相互の行動確認のために参加学生を3人ずつのグループに分けた。また、未成年者が多かったので、車中や宿泊先での未成年者の飲酒は、厳禁とした。

8) 担当教員の思い入れと熱意（担当者の関与因）

スタディーツアーは、基礎演習の義務でもなければ課題でもない。諸般の事情でたまたま担当しただけなので、敢えてスタディーツアーを基礎演習に取り入れる必要もない。筆者の研究の専門分野ともあまり関係はないし基礎演習を履修した学生それぞれが、専門演習の履修者と違って、基礎演習に対する明確な意図や期待を持っているわけでもなかった。震災地のスタディーツアーに参加を意思表示してもツアーへの参加動機も期待もはっきりしていなかった。学生の感想文の中でも、現地に着くまでのバスの8時間は“めんどくさい”、“参加しなければ良かったと思っていた”といった記述にも見られるように、最初は、受動的な参加意欲しかなかった学生もいた。また、ツアー中に事故が起これば、担当教員は別の気遣いをしなければならないし、経済的に足が出ても最終的には担当者がカバーしなければならない。こういった状況の中で敢えてツアーを企画し実行したのは、軽微ではあったが、筆者の仙台での個人的な震災体験から、たまたま「陸前高田地域再生支援プロジェクト現地調査」に加わったことで、被災地の様子に直に触れ、1人でも多くの現代福祉学部の学生に現地を訪れてほしいという願いに他ならない。スタディーツアーを実施場合は、担当教員がこういった野外学習の分野に精通しているか、何らかの思い入れと熱意がないと実行できないと感じた。

9) 学生のツアー企画への積極的関与（学生の関与因）

今回は、学生がほとんど現地の様子を知らなかったこと、入学当初で学生が中心になって企画運営に関与する雰囲気になかったこと、スタディーツアーへの動機づけがほとんどなかったことなどから、ツアーの企画、バスの手配から民宿の手配、震災講話の該当者との連絡、経費の計算までほとんど一切を筆者がやらざるを得なかった。ツアー中の視察先もほとんど学生は受身の姿勢で参加させてしまった。どこの被災講話でも、学生からの自主的な質問はほとんどなく、筆者が促したり、間を取り持つために質問をせざるを得なかった。前期は、基礎演習としての共通課題も多く、学生同士のつながりも希薄である上に、講義や学部の行事も多く演習の時間外に集まって打ち合わせをする機会はほとんどなかったので仕方がないと思うが、学生たちがもっと積極的にツアーに参加するためには、視察先や宿の交渉、会計、被災講話者との交渉、現地でのボランティア活動の企画などに関与する機会を工夫べきだったと反省している。

10) 事後学習と専門的な学習への橋渡し（事後学習因）

後期は、忙しかったこともあり、学生達には、スタディーツアーの感想文を提出させ、基礎ゼミ内でのグループ毎の発表の機会を設けたただけだったが、体験したことを福祉や地域作り、臨床心理に繋げたり橋渡しをするような意図での事後学習は特にしなかった。フィールドスタディーの意味や体験学習の大事な意味を専門の実習に繋げるようなまとめが出来なかったのが心残りだった。

6 結語

東北地方の海岸沿いで被災した方々に比べれば極めて軽微な体験であったが、筆者の仙台での個人的な震災体験から「陸前高田地域再生支援プロジェクト現地調査」にボランティアで参加したことがきっかけで、筆者の担当する学部1年生を対象にした「基礎演習」で被災地のスタディーツアーを企画・実施した。手探り状態で実施した試行的なスタディーツアーではあったが、学生の事後レポートには、“災害による悲慘さ、怖さ、虚しさを感じた”、“被災地以外の地域の力を借りなければ復興は難しい”、“震災地の人々の話を聞くことも一つのサポートなのだ”、“同じことが繰り返されないような町づくり上の対策の必要性を感じた”、“震災地へ行ってサポートするためにもボランティアの知識をしっかりと身につけたい”、“コミュニティの強さが被害を少なくさせた”、“東北の人たちはかわいそうになどと悲しんでいるだけではなくて、行動を起こすことの大切さを感じた”、“被災からすでに1年経った今でも手伝えることは山ほどある”、“今できる事はなにか？具体的に考えて積極的にそれらを実現していきたい”、“自治体の力を強め緊急時に迅速な対応がとれるようにし、みんなで協力して助け合っていくことが大事”、“実際に目で見て、耳で聞き、自分なりに噛み砕いて理解し、想像するといった行程を踏まえた上で改めて考えてみるとずいぶんと考え方、思いが変わっている事に気づく事が出来た”、“なぜ先生方がフィールドワークを重視するのが見えたスタディーツアーでもあった”、“このスタディーツアーは必ず今後の進路や人生について重要な分岐点になると感じている”、“回りにいる人に、実際に被災地に行ってみる事を勧めるようになった”、“まだ現地は震災の爪痕が残っているが、復興のために何ができるかを今一度考え、また今回自分が現地で見たもの、伺った話などを、みなに伝えていくことが大切であろうと思う”、“報道ではよく見かけていたが実際に自身で調べ、まとめ上げ、そして他のゼミ生に発表したことにより、震災に対しての自身の意見をはっきりと持つことができた。あらかじめ調べたからこそ、スタディーツアーをより良いものにできたのだと思う”など学生の反応を見る限り、ねらいとした教育効果は、かなり達成し得たと感じている。

この試行的なスタディーツアーの企画過程、実施結果、学生の事後レポートを検討し、スタディーツアーを効果的に展開するための一般的な構成因として、「目的因」、「内容因」、「事前調査因」、「経費因」、「期間因」、「動機づけ因」、「事故対応因」、「担当者の関与因」、「学生の関与因」、「事後学習因」を抽出した。スタディーツアーの対象が何であれ、最低限これらの要因を満たして実施することによって、一般的にも効果的な野外学習やスタディーツアーの成果が得られるのではないかと考えている。これらの構成因は、福祉や地域づくりを専門とする研究者から見ればごく当たり前の構成因なのかもしれないが、先行研究には、それらしき文献が見当たらなかったのではと

めてみる意味はあったと考える。

また、スタディーツアーや野外実習は、担当者の責任とかなりの時間や精力を必要とするだけでなく、時として思わぬ事故や経済的な出費を伴うので福祉や地域作りを専門とする研究者の苦勞が判ったような気がする。「基礎演習」では、野外教育や校外実習、スタディーツアーの類いは求められていないので、筆者のような専門外の担当者は、うかつに手を出さない方がいいのではとも感じたが、同時に本学部のような社会とのつながりの深い高等教育機関では、条件を整えて学生が野外学習やスタディーツアーから体系的に学ぶ機会をこれまで以上に整えていく必要も感じた。

また、本稿を纏める過程で、もう一つ強く感じたことがある。それは、大学教育における、スタディーツアーのような体験学習の理論研究があまり進んでいないということである。同時に、ビジネス界のPDS (Plan, DO, See)、PDCA (Plan, Do, Check, Action)、PDCI (Plan, Do, Check, Improve) サイクルや、SECI (Socialization, Externalization, Combination, Internalization) モデルを検討したり、あるいは J. Dewey の哲学的プラグマティズム(Philosophical Pragmatism)、K. Leeinの社会心理学 (Socal Pshychology)、J. Piagetの発生的認識論 (genetic epistemology) を基にD.Kolb (1984) が発展させた体験的学習理論 (Experiential Learning Theory:ELT)、つまり、学習スタイルインヴェントリー (Learning Style Inventory:ASI 1971) を使って発展させた具体的体験 (Concreate Experience:CE)、内省的観察 (Reflective Observation:RO)、抽象的概念化 (Abstract Concepyualization:AC)、能動の実験 (Active Experimentation:AE) の学習循環理論などを踏まえて、大学における体験過程モデルやその重要性を改めて検討し、大学のカリキュラム構成のなかに反映させていく必要があるのではないかとということである。数年前に学部の自己点評価のとりまとめにも関わったことがあるが、日頃どの教員も体験学習の重要性を認識していながら、それらの認識を、自己点検評価に盛り込んで来ていなかった事に改めて気づかされた次第でもある。

<参考文献>

- 1971 Kolb, D.A. Individual learning styles and the learning process. Working paper #535-71, Sloan School of Management, Massachusetts Institute of Technology.
- 1884 Kolb, D.A. Experience as the source of learning and development. NewJersey: Prentice-Hall.
- 1995 末武康弘、石原 拓、野口明子、尾形 健「教職教育とフィールドスタディー」、『明治学院論集』191-206 明治学院大学文学会
- 1999 Kolb, D.A., Boyatzis, R.E., Mainemelis, C. Experiential Learning Theory: Previous Research and New Directions. Dept. of Organizational Behavior Weatherhead School of Management Case Western Reserve University

- 2001 福屋ゼミ『基礎演習報告書』法政大学現代福祉学部
- 2001 馬場ゼミ『基礎演習報告書』法政大学現代福祉学部
- 2002 馬場ゼミ『基礎演習報告書』法政大学現代福祉学部
- 2002 宮城ゼミ『基礎ゼミ論文集』法政大学現代福祉学部
- 2002 山岡ゼミ『基礎演習レポート』法政大学現代福祉学部
- 2005 福屋ゼミ『基礎演習報告書』法政大学現代福祉学部
- 2006 福屋ゼミ『基礎演習報告書』法政大学現代福祉学部
- 2007 井洋二郎「米国ビジネススクールにおけるマネジメント・フィールドスタディーの教育効果について」、『人文科学論集』第52・53輯合併号 69-89 明治大学経営学部
- 2007 居駒永幸「フィールドスタディーの授業展開－宮古島の社会と民族文化－」、『人文科学論集』第52・53輯合併号 51-61 明治大学経営学部
- 2007 山下充「フィールドスタディーに求められるもの－学部教育における実習科目の新しい役割」
- 2007 湯沢規子「フィールドスタディーにおける今後の課題」、『人文科学論集』第52・53輯合併号 91-105 明治大学経営学部
- 2008 山下充「事例研究（ケーススタディー）の教育効果について－フィールドスタディー授業の試みと課題－」、『人文科学論集』第54輯 113-122 明治大学経営学部
- 2010 現代福祉学部10年誌編集委員会 『現代福祉学部 10年誌』 法政大学現代福祉学部
- 2011 齋藤篤志『東日本大震災における民生委員児童委員活動について』岩手県陸前高田師民生委員児童委員協議会
- 2011 東京4大学・陸前高田地区再生支援研究プロジェクト『陸前高田応急仮設住宅団地調査報告書』
- 2011 陸前高田市『陸前高田市震災復興計画』
- 2011 星野敏男、金子和正 監修『野外教育の理論と実践』杏林書院
- 2012 岡崎・安井ゼミ、スタ学一同『遠野×鶴住居スタディーツアー』法政大学現代福祉学部
- 2012 神谷秀美『陸前高田市広田地区集団移転協議会への活動支援にかかる報告所見』株式会社マヌ年建築研究所
- 2012 現代福祉学部 『講義概要』 法政大学現代福祉学部
- 2012a 陸前高田地域再生支援研究プロジェクト（代表：宮城孝）『被災住民のエンパワメント形成支援による地域再生の可能性と課題』法政大学サステナビリティ研究教育機構
- 2012b 陸前高田地域再生支援研究プロジェクト（代表：宮城孝）『陸前高田の応急仮設住宅団地

東日本大震災で被災した陸前高田市並びに広田地区のスタディーツアーの試みと震災地スタディーツアーの効果を高めるための構成因

調査報告』

2012 広田地区集団移転協議会 『広田地区復興マスタープラン』

2013 陸前高田地域再生支援研究プロジェクト（代表：宮城孝）『陸前高田市の応急仮設住宅団地調査報告書』法政大学サステナビリティ研究教育機構 震災・原発タスクフォース